

◆ 日本公認会計士協会

北部九州会

<http://n-kyusyu.jicpa.or.jp/>

2019.07

232
号





インパール訪問記

北九州・筑豊部会 廣瀬隆明
Takaaki Hirose

1月27日から2月2日まで、インドのインパールとその周辺都市に、戦跡巡りと慰霊を目的に行ってきました。旅行代理店から案内があり申込みをしました。募集人員が15名のところ申込みが6名ということで実施が危ぶまれましたが、何とか行くことができました。私以外の参加者は北海道から1名、宮城県から3名、新潟県から1名、それに今回は旅行代理店の社長も同行しました。

インドといえば逆三角形の国土を思い浮かべる方が多いと思いますが、その三角形の北東の角からまるで橋のような狭い国土が東に延びて、その先にバンダラデシユを取り囲むように国土が広がっており、東はミャンマーと接しています。今回訪問したのはミャンマーとの国境付近の都市ですが、住民の多くは日本人と同じような顔立ちをしています。民族や文化等の違いから過去にはインドからの

独立運動があり、外国人の立入りが禁止されたこともありました。今回も特別な許可証を入手しての旅行となりました。



行程は成田からデリーまで約9時間、到着が夕方になりましたのでデリーで1泊して翌朝コルカタ（旧カルカッタ）まで約2時間、そこで乗り換えてデイマプルへ約1時間半、デイマプルから

は四輪駆動車3台に分かれ、コヒマ、インパールへと幹線道路を南下し、コヒマとインパールでそれぞれ2泊しました。デイマプルとコヒマ間は約75km、コヒマとインパール間は約100kmです。幹線道路と言っても片側一車線の道路幅でほとんど舗装されていないため、土ほこりを巻き上げながらの運転です。道路に面した住宅や草木はみな土ほこりで真っ白になっており、健康には相当悪いのではないかと思います。

(1) インパール作戦

ところで、インパール作戦は1944年3月8日に開始されましたが、太平洋戦争で最も無謀な作戦と言われています。第一五軍(司令官は牟田口廉也中将)が当時劣勢であった戦局の潮目を変えるべく、英国軍の根拠地であったインパールを占領しようと思論んだものです。

第一五軍隷下の三師団、北から第三十一師団(師団長は佐藤幸徳中将)、第十五師団(師団長は山内正文中将)、第三十三師団(師団長は柳田元三中将)合計約5万人と第十五軍



直轄部隊3万5000人、合わせて8万5000人が投入されましたが、兵たん、つまり武器、弾薬、食料、医薬品などの補給を全く度外視したでたらめな作戦で、将兵は飢えやマラリアなどの病気に侵され、およそ3万人が亡くなったと言われています。

3人の師団長が作戦途中で解任されるという異常な事態が発生し、中でも佐藤師団長は日本陸軍始まって以来初の、司令部の命令に抗命するという事件を起こしています。

作戦は7月3日に正式に中止されましたが、死者はむしろ作戦中止後の退却時に多く発生しました。屍が累々と横たわる撤退路が「白骨街道」と呼ばれたことは皆さんもご存じかと思えます。

(2) コヒマ三叉路

写真はコヒマの要衝、コヒマ三叉路です。私の背後にまっすぐ延びる道はコヒマ市街地につき、私の右手の方向に行けばダイヤモンドです。ダイヤモンドには英軍の兵たん基地がありました。また、左手の方向に行けばインパールです。

私の正面には小高い丘が連なっていますが、交通の要衝を見下ろす形になるため、これらの高地を巡って第三二師団と英軍の激しい戦いが繰り広げられました。



およそ2か月の戦いで日本軍は30000人、英国軍は10000人の死者が出ました。

私が立っている辺り一帯は現在墓地公園となっており、戦死したインド人を含む英国軍人のお墓や慰霊碑が建立されています。

います。

一方、日本軍の将兵の遺骨は二、三百柱が収集されたのみです。国は遺骨収集を推進しており、コヒマのホテルでは3名の遺骨収集の事前調査隊に会いましたし、インパールのホテルでも別の事前調査隊に会いました。ただ、戦後70年以上の歳月が、遺骨収集において大きな壁となって立ちはだかっています。

(3) サトウ村

戦争博物館などコヒマ周辺を参観中、現地のガイドが第三十一師団の司令部が置かれた村があるとの情報を仕入れてきました。予定にはありませんでしたが急きよ訪ねることになり、この村で大変貴重な経験をすることができました。

村の正式名はキグマエ村ですが、師団長の名前からサトウ村とも呼ばれています。村の入り口の広場に石碑があり、英語で「日本の軍隊が第二次大戦中の1944年4月4日午後3時に現れた」と記されていました。

佐藤師団長が居留していた家も見学することができました。この村には第



三十一師団が独断撤退した6月1日までいたものと思われず。

村の標高は約1500m、人口は、良くわかりませんが1000人くらいでしょうか。村人は日本人によく似た顔立ちで、木造の家に土間や土壁、軒先には薪が積まれ、ニワトリを飼い、山のすそ野には良く整備されたきれいな棚田が一面に広がるといった具合で、昔の日本の山村そのものでした。

村のあちらこちらを見学していると、日本軍が駐留していた時のことを覚えていた老人がいるということがわかり、お話をお聞きすることになりました。

MR SEISAYANO氏、アンガイ族の93歳の男性で、当時の年齢は18歳です。

軍票と引換えに日本軍に食べ物を提供したこと。ただ、その軍票は紛失したようで今は持っていないとのことでした。

日本軍は略奪や暴行を働かなかったこと。これは私たちが日本人であるため遠慮して言ったのではないと思います。日本人によく似た顔立ち、日本の田舎でよく見る風景、第三十一師団は甲府出身

の兵が多く農村出身の将兵もたくさんいたはずで、村人を自分たちの親兄弟と重ね合わせていたのではないかと思います。

さらに、佐藤師団長が略奪、暴行などの行為を厳しく禁じたとも言われています。

最後に、「当時のことでほかに何か覚えていますか」と質問したところ、兵隊から歌を教わったと言い、「ポツポツポハトポツポ」と口ずさんだのです。

これには大変驚きました。「はと」は童謡ですので現地の人たちにも覚えやすいと思ったのでしょうか。

写真は最後に皆で合唱しているところです。

「ポツポツポハトポツポ マメガホシイ カソラヤルゾ ミンナデナカヨクタベニコイ」

将兵たちは、国に残した肉親のことを想いながらこの歌を教えたに違いありません。

日本には無事帰還できたでしょうか。



そのようなことを思っていると胸が熱くなり、とても声を出して歌うことができませんでした。私はただ、歌に合わせて口パクをしていました。